

『宮廷女官チャングムの誓い』（以下、『チャングム』と記す）前半で最もドラマチックな部分。ハン尚宮（さんぐん）が果敢に闘い、宮廷における厨房の責任者として、果敢に活躍する。そしてチャングムとチェ尚宮、チャングムとハン尚宮、またチャングムとミン・ジョンホの過去の因縁が一気に表面化し、料理とは離れたところで闘いが行われる。クミョンのミン・ジョンホへの想い（恋）もからんでいて、おもしろい。ただ、もう1話ぐらい、食に絡んだハン尚宮の活躍があつて欲しかった。ハン尚宮は韓国でも人気があつたそう。

振り返って、日本で放映されている多くのドラマは虚しい。水戸黄門の勧善懲悪パターンであるとか、韓流の『冬のソナタ』もそうであつたと思うが、昼メロ・パターン。そういった人の感情を良きにしろ悪きにしろ動かすパターンがあつて、そこに俳優を配置するだけのドラマが多い。そこに発見的な、奮起させる様な、あるいはいつまでも自分に残る様な奥深さが無い。それにも関わらず、自分の気分が高揚し、また目頭が熱くなるのは虚しいことである。良いドラマももちろんあつた。『北の国から』など倉本聰のドラマ、『大地の子』、数年前にリメイクされた『白い巨塔』（最近、再放送されている）など。何度も思い出して味わうことができる。最近では、量産されるテレビ・ドラマに期待していないので、観るのはもっぱら映画などのビデオにしている。

『チャングム』を観始める前、しばらく、イギリスで放映されたドラマを観ていた。19世紀イギリスのディケンズやオースティンが原作のものが図書館に幾つかあつて、続

けて観た。それ程ドラマチックではなかったが、19世紀イギリスという異文化が感じられ、おもしろかつた。この2人の作家はだいぶ作風が違うが、そこに19世紀イギリスが浮かび上がる。「階級」、「遺産」、「暗さ」、「紳士淑女」、「時代の変化」。そんな言葉が説明しようとする、浮かび上がって来る。日本人の多くと同じく圧倒的にハリウッド映画を観る機会が多かつた私には、イギリス人に対して「思慮深さ」「内向性」という言葉も出て来る。オースティンの小説の読書会を舞台としたアメリカ映画が最近あつた。英

文学を学んだ人が言うには、アメリカでは英文学古典を読むことは上流階級の基本的な教養であるという。異文化における事物の違いだけでなく、文化や人間性のモードの違いが分かつておもしろい。演じるイギリス人俳優にも興味を覚えた。当たり前のことだが、日本に個性的な俳優がいるように、イギリスにも個性的な俳優がいる。

『チャングム』における異文化は、日本人にとっては更に特別なものである。俳優は皆、見た目は日本人と変わらず、日本のテレビやどこかで見たことがある感じがする。だから逆に異文化感覚も高まる。『冬のソナタ』も懐かしい昼メロが異文化におけるものだったから、更に人気を呼んだのではないか。同じだという印象が強いと、違いが気になり、違うという印象が強いと、同じところが気になる。私がインドを長く旅した時には、同じところが気になった。

『チャングム』が私にとって更に格別なのは、食や医がその中心軸にあるドラマであるからだ。鍼や漢方薬の中国における状況は多少知っていても、韓国における状況はほとんど知らなかつた。（2008年4月清明）

【雑想】チャングム（3）ドラマ・異文化

斉観堂鍼灸・氣功治療院 鈴木斉観